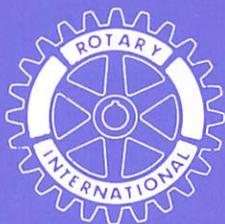


THE ROTARY CLUB OF NAGOYA-CHIKUSA



WEEKLY

なごや ちくさ



題字 黒野貞夫

名古屋千種ロータリークラブ
 承認 1982年 8月24日
 例会日 火曜日 12:30
 例会場 愛知厚生年金会館
 事務局 ☎763-5110
 会長 秋山茂則
 幹事 和田正敏
 会報委員長 佐野寛

No. 26

自分を越えた眼を

LOOK BEYOND YOURSELF

1991~92年度 RI会長 ラジェンドラ・K・サブー

第464回例会 平成4年1月14日(火)晴

◇ “奉仕の理想”

◇出席報告

会員 66(64)名 出席 49名
 出席率 73.44%
 前回 1月7日(修正出席率)96.88%

◇ビジター紹介 4名

◇お誕生日祝福

石田夫人(1/4)西野君(1/10)、市原君(1/15)、
 鈴木(正)君(1/16)

◇ニコボックス

秋山 茂則君 今日の笑顔よろしく。
 上野 保君 ①ゴルフ部ハワイツアー只今参加者8名、皆様どうぞご参加下さい。②岩田和子さん、ご婚約おめでとうございます。
 鷺谷 龍男君 ゴルフ会欠席致します。申し訳ありません。
 佐久間良治君 明日は長女の成人式です。
 西野 英樹君、市原 数男君、鈴木 正男君 誕生日祝い。
 石田 耕嗣君 夫人誕生日祝い。
 小山 雅弘君、菅原 宣彦君、鷺野 義明君、
 西村 禎二君 結婚記念日祝い。

◇和田幹事報告

1. ロータリーの友1月号が来て居りますので、お帰りにお持ち下さい。
2. 事務局の岩田和子さんが4月25日にご結婚されることになりました。ご結婚後もお勤めをお続けになるとのことです。

◇ロータリー財団奨学生 羽佐田理恵さん挨拶

只今ご紹介にあずかりました羽佐田理恵と申します。
 あと1か月足らずでオーストラリア国立大学へ留学することになっています。私のホストクラブは、キャンベラノースなのですが、

もう既に3人の方からお手紙を頂きました。又、カウンセラーの方からもお電話を頂いたりで、オーストラリアにしてよかったと実感しております。

あちらでは応用言語学を学ぶ予定でむこうの大学の1・2年生に日本語を教えることが決まっております。オーストラリアで日本語を学ぶ方達は、これから日本語を手段としてビジネスの世界で活躍する人達ですので、日本語の機能的な面だけでなく、文化的にも交流が深まるよう努力して参りたいと思います。

それでは、今日は本当に有難度うございました。



◇秋山会長挨拶

心の国際化

ブッシュ大統領の訪日の際、米国のビッグ3のトップが同行しました。3名の話は、日本は不公平だ、輸入障壁が多いなどと日米の不均衡を激しく非難し、苛立ちさえ見せて対米輸入の拡大を強く迫りました。ある雑誌に猿谷要さんの講演記事がありました。そこには、いまや国際化は著しい進展を見ているが、その裏で「アグリージャパニーズ」(醜い日本人)という国際的イメージが定着しつつあるとの活字が目に入りました。それは日本人があまりにも心の国際化を欠いていることに根ざすものであり、それは歴史的に培われたものであり一朝一夕にはならない。しかし日本人

すべてが実行すべきことだと述べられ、その記事の中で、初代駐日大使としてハリスが下田へ来た。ハリスは滞在中綿密な日記を書いており、その中の一つに「日本の幕府の役人は世界最大のうそつきだ」と書いているのです。ハリスの交渉相手の下田奉行が少しも約束を守らなかったからです。しかし下田奉行は決定権がなく逐一幕府に伺いをたてなくてはならず、そのためもう少しまってくれとか何とか、なだめすかしたりの返事しかできなかつたわけです。ハリスの日記からみてもアメリカ人の感じている今の日本の役人の姿勢と幕末の日本人の対応と差がないというわけです。アメリカ大統領の要請に対し日本の総理は「前向きに対処します」と笑って答えるようですが、実質的に何もしないことであることが最近わかって来たようです。場当たりの相手をくすぐるような、のらりくらの対応がビッグ3の3人だけでなく多くの外国人を苛立たせているのでは。

◇講演

“出版という業”

会長 秋山 茂則君

言い古された言葉ですが、出版は志の業と云われてきました。現在の幅狭する情報化社会の中では個人的な価値としての自らの志の要素は少なくなっているかも知れませんが、自分の思想、信条、人生観を表現する手段として出版が最も適したものであり、過去の出版人たちはそれぞれの思いをそれに託して来ました。しかし資本主義経済社会の中において商業的に成り立つか否かといった経営論と対立する一面もあったことは否めないと思います。それとまた、当たる当たらないといった言葉に表現される、一獲千金的な思考、いわば博打的要素も出版という業の中には重要な地位を占めています。当てようという思考も志の一片であります。その典型として戦後の出版人の中の代表的存在は神喜晴夫氏であります。「ベストセラーは作られる」と云った氏の言葉は出版史上に残る名句であります。光文社を興した氏は、よい筆者捜しに懸命な日々を過ごす中で、児童心理学者(お茶の水大学教授)の秦野勤子氏を訪ねたとき、彼女の研究発表の原稿の出版の依頼をうけました。神喜氏は「読まさせていただいてから決めさせていただく」と出版の約束はしなかったが、原稿を預かり、徹夜で読んだ。当時の彼の述懐によると「読んでいくうちに泣けて泣けて仕方がなかった」と云い、これこそ世に出すべきものだと思えた。そして「私の涙に同調してくれる人が5千人はいるだろう」と思い、「少年期」という題名で5千部を印刷した。さてどうやって読者に紹介するか考えた末、多くの学者、評論家、有名人に寄贈した。それらの人々の口コミに期待した。当時朝日新

聞夕刊のコラムを担当していた坂西志保氏がこの本を読んで「最近感動した本」としてコラムで紹介したことが一躍「少年期」の名を挙げ、それをきっかけにして50万部のベストセラーになった。神喜氏はこの経験を踏まえ、「バスに乗り遅れまい」とする大衆の心理に訴えることによってベストセラーを生み出すことができると確信し、出版する度に有名人の書評を促し、新聞に大々的に広告をうった。その後いくつかのベストセラーを手掛け、中にはミリオンセラーになったものもあった。神喜氏は出版野郎として自の志を果たした人でした。その後ベストセラー社とか青春出版社などが神喜流商法で名を挙げ成功してきました。出版業は比較的少ない資金でその気になれば誰でも出来る業で、現在大小取混ぜて2千社とも3千社とも云われております。まさに戦国業界であり、何処かで売れるものが出るとすぐそれを真似たものが出版され、節操のない時代に入っております。

》雑誌の窓《

「ロータリーの友」12月号に元日本原子力研究所理事・吉田節生氏の「人口の爆発的激増とエネルギー問題」と題する寄稿がある。

国連人口白書を引用し、「地球上の総人口が54億人になった。17世紀の半ばではそれがわずかに5億人だった。しかも22世紀ごろに116億人ぐらいに膨れ上がってようやく頭打ちになろう」と、人口の急増振りを紹介し、「今後人類の運命は、またその生活を支えるエネルギーは一体どうなるであろうか」と、エネルギーに係わる深刻な問題を提起している。

筆者はその職業柄、「何といっても大切なのは省エネである」と、その必要性を説いた上、「化石燃料代替エネルギーの開発である。少なくとも21世紀前半まではウランをうまくサイクルにのせて使えば数百年はエネルギー源と期待できる原子力に、できるだけ多くかつ速やかに切り替えるべきであろう」と、当面の対策を提唱し、「少なくともこのくらいは実行しなければ、地球を支配して巨大になりすぎた恐竜がある時突然地球上から姿を消したように、人類も同じ運命をたどらないという保証はどこにもないが、私は人間の英知に期待している」と、結んでおられます。

担当 今井 浩登君

◇次回例会(1月21日)

講演 “郵便局のサービス向上運動”

千種郵便局 局長

廣林 止美氏

(紹介 水野(民)君)

◇次々例会(1月28日)

講演 “我が国の天然ガス事情”

東邦ガス(株)東部支社 支社長

大嶽 恒雄氏

(紹介 永井君)